


kaminorippo.org

# 神の律法：序章

イエスに従っていると主張しながら、イエスの父が命じられた律法に、承知のうえで従うことを拒む者たちには、永遠の命は与えられません。神の律法の一部を退ける者は、だれであれ神の権威を全面的に退けているのです。安息日、割礼、禁じられた肉、tzitzitの着用、髭、そしてそのほかのあらゆる戒めは、真に救いを望むすべての魂によって、それにふさわしい真剣さをもって受け止められなければなりません。

## 2つの誤った前提

キリスト教の指導者たちが、預言者たちを通して私たちに与えられた神の律法への従順を退けるために用いる議論は、2つの誤った前提に基づいています。

## 誤った前提1：異邦人のための別の道

第1の前提は、旧約聖書はユダヤ人のためのものであり、新約聖書は異邦人のために別の救いの道を作り出した、というものです。それが意味するのは、イエスご自身、その両親、親族、使徒たち、弟子たちを含め、人々が何世紀にもわたって従ってきた戒めに、異邦人はなぜか従うことができない、ということです。異邦人には、永遠の命を得るためにもはや神の永遠の律法に従う必要のない、もっと容易な道が必要だったというのです。

この誤った信念は、4つの福音書のどこにも、イエスが異邦人のために新しい宗教を始めると語られた箇所はないという事実を無視しています。もしこれほど重大なことが真実であったなら、キリストはそれについて何の疑いも残されなかったはずです。だれもが理解できるように、明確な言葉で、しかも多くの箇所でそれを教えられたはずです。

さらに、旧約聖書の預言の箇所のどこにも、メシアが異邦人のために、神の律法への従順がもはや求められない新しい救いの道を作るために来られるとは書かれていません。

預言者たちは、異邦人について語るたびに、1つのことを明確にしています。神は、ユダヤ人にご自分の律法に従うことを期待しておられたのと同じように、異邦人にもそれに従うことを期待しておられました。それ以上でも、それ以下でもありません。

- *「その土地に生まれた者にも、あなたたちの間に住む外国人にも、同一の律法がなければならない」（出エジプト記12章49節）。*
- *「会衆には同じ律法がなければならず、それはあなたたちにも、あなたたちの間に住む異邦人にも適用される。**これは永遠の定めである**」（民数記15章15節）。*
- *「主に連なって主に仕え、こうして主のしもべとなり…また、わたしの契約を堅く守る異邦人、彼らをも、わたしはわたしの聖なる山に連れて行く」（イザヤ書56章6–7節）。*

今日存在する救いの計画は、世界の初めから存在してきたものと同じ計画です。すなわち、罪人が、ユダヤ人であれ異邦人であれ、自分の罪を悔い改め、神のすべての戒めに全力で従おうとすることによって、その悔い改めが本物であると証明するのです。主はその人の心と行動の変化をご覧になり、そのとき初めて、小羊の血によって洗われるようにその人を送られます。これこそ道理にかなった救いの計画です。なぜなら、これは真実だからです。*「わたしを遣わされた父がその人を引き寄せなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない。そして、わたしはその人を終わりの日によみがえらせる」（ヨハネによる福音書6章44節）。*

## 誤った前提2：キリスト教徒は神の律法を捨てた人々に従うべきである

第2の誤った前提は、イエスが父のみもとに戻られた後、初期の諸教会は神の多くの律法に従うのをやめ、私たちもその模範に従って同じことをするべきだ、というものです。その考えによれば、イエスの後に現れた何人かの人々が、割礼、安息日、禁じられた肉など、イエスとその弟子たちが忠実に従っていた多くの戒めは、キリストに新たに従うようになった人々なら無視しても差し支えないと、教会に教えたことになります。



神の聖なる永遠の律法は、時の初めから忠実に守られてきました。イエス、その家族、友人、使徒たち、弟子たちは皆、神の戒めに従いました。

しかし現実には、イエスは、ご自分の後に救いについての新しい教えを携えた人々が現れ、私たちがそれを聞いて従うべきだとは、一度も語っておられません。旧約聖書にも4つの福音書にも、メシアの後に、神がご自分の民のために新しい教理を携えただれかを遣わされるという預言はありません。救われるために私たちが知る必要のあることは、すべてキリストが教えられました。イエスの言葉で十分です。

神は、人間の反逆をまねるようにと、私たちに命じられたことは一度もありません。不従順へと流れていった人々が、たとえキリストの時代に近い時期に現れ、権威を主張していたとしても、その人々に従うようにとは、どこにも書かれていません。イエスご自身の口から直接教えを受けた使徒たちと弟子たちは、神がすでに預言者たちを通して明らかにしておられた戒めに忠実でした。もし後になってほかの人々がその道から離れたとしても、私たちが従わなければならないのは、彼らの逸脱ではなく、師と、師ご自身が実践された従順なのです。

## このサイトで取り上げる内容

このサイトの記事では、ほとんどの教会が無視したり、和らげたり、説明によって骨抜きにしたりしている戒めを詳しく検討します。神の律法は、多くの人が教えられてきたような担いきれない重荷ではなく、明確で義にかなった道であることが分かるでしょう。神は、魂をわなにかけるために、混乱を招く何百もの要求をお与えになったのではありません。神の戒めは数が少なく、力強く、知恵に満ちており、真に神を畏れ、永遠の命を望む者たちには、すべて十分に守ることのできるものです。問題は、神が多くを求めすぎたことでは決してなく、人間が従順よりも自分にとっての都合のよさを愛していることなのです。

神の律法への不従順は、人生のあらゆる部分に混乱をもたらします。心、家庭、人間関係、経済面、さらには体にまで及びます。しかし、神の力強い律法に服する者たちは、まさに神が従順な者たちに約束されたもの、すなわち祝福、救い出し、守り、そして人生のあらゆる領域での神の恵みを期待すべきです（詩編1編2–3節）。神の戒めは、秩序、安定、そして神の前での清い良心から生まれる深い平安をもたらします。何よりも、自分が救いの道を歩んでいるという確信をもたらします。神の律法に承知のうえで逆らう者たちは、これらの良いものを何一つ期待すべきではありません。主は、ご自分の権威を拒む者たちに、ご自分の最良のものを注がれることはありません。